The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	いのちの遠近法 : 意味と非意味の哲学
Author(s)	菅野, 盾樹
Citation	大阪大学, 1995, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/39624
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【5】

氏　　名	菅（すげ）　野（の）　盾（たて）　樹（き）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学位記番号	第　12192　号
学位授与年月日	平成7年12月22日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	いのちの遠近法——意味と非意味の哲学
論文審査委員	(主査) 教授 奥　雅博 (副査) 教授 青木　保　教授 厚東　洋輔

論文内容の要旨

事象をさまざまなカテゴリーに包摂しながら把握し類別し互いに秩序づける人間の働き，一言で〈分類〉(classification) の営みは，人間の生にとり最も基本的な意義を有している。人間言語の開花と人間の意識化とともに，分類は著しい洗練と多様化を示すものの，すでに言語以前のレベルで，運動＝感覚系たる身体の機能としての分類が営なまれている事実を見過ごすべきではない。むしろ言語的・意識的分類とは，人間存在の身体性に依拠した分類を基礎として育まれた，その認知的拡張にすぎないのである。

本論文は〈分類〉に主要問題を絞って試みられた哲学的考察である。同時に本論文は，こうした問題設定によって目の前に拓かれる問題群を,哲学的人間学の関心に導かれて踏査しようとする試みでもある。例えば，本質，意味，因果性，知覚と感覚，内部と外部，そして理性などの伝統的な諸問題が順次検討されることになる。それらの考察をひとつながりのものとして連接した本論文が，哲学的人間学の新たな構想を一部なりとも果たすこと，これが筆者の希求するところである。

本論文は，本論をなす四つの章と問題を定位し方法を訊ねるメタ哲学的考察を担当するプロローグおよびエピローグから成っている。本論の第I章「人間はどのように〈世界制作〉をいとなむか」は，分類という人間の営みを基礎的存在論の問題関心から分析することを通じて，〈世界に住まう存在（l'être au monde）である人間にしかじかの世界が到来する〉という事態を闡明することを試みる。換言すれば，人間にとってそもそも世界（事象の経験）がありうるのはなぜか，事象の本質と意味がいかに生起するかを考察することが，本章の主たる目的である。

赤裸々な個別者（bare particulars）はどんな分類も容れ得ない。分類はつねに一般性の指標をおび，何らかの一般者に帰属する個体（individuals belonging to a certain universal）をもたらす。この一般者を本論文では種（kind ; species）と名づける。古来，分類の基礎をめぐって本質主義の見地が唱えられてきた。すなわち，アリストテレスに顕著であるように，事象はそれに内属する〈本質〉によって種へと分類されるという考え方である。また〈本質〉はしばしば分類をおこなうために必要かつ十分な基準のセットに対応すると見なされてきた。しかし，ウィトゲンシュタインの「家族的類似」の指摘をまつまでもなく，こうした基準で本質を確定しうる事象（例えば，特定の幾何学的図形）は

存在領域のごく一部分を占めるにすぎない。たいていの事象はその本質を脅かす曖昧なものを巻き添えにせざるを得ないし，かえってこの曖昧なものを本質のいわば糧ともし共犯者ともなしているのである。

古典的な本質主義に向かって回避し得ない問題をつきつけ本質問題の新たな転回をもたらしたのは，経験論者J.ロックの怪物論であった。本章は彼の怪物論がおおむね妥当であることを論証するとともに，いっそう広範な思想史の眺望に立って，経験主義と合理主義の原理的角逐の表現を〈連繋の原理〉と〈拘束の原理〉との対立として析出するとともに，後者が，現実主義ないし実在論という形而上学的枠組みにおいては〈異象排除原理〉というヴァージョンに転化することを確認する。

メルロ＝ポンティは，その主著『知覚の現象学』で，知覚される事象（le perçu）の属性を記述しているが，そのテクストの読み直しによって，本章では属性の義務論的本性（deontic nature）や事象の換喩的構成などの知見がもたらされる。さらにこうした現象学的記述を補うために，述語としての「曖昧さ」の論理的観察によって，これが高階の述語であり指向性をおびる（intentional）ことが明らかにされる。

以上の観察を土台にして種のオントロジーを記述するに際して，この上なく示唆的なのは「グッドマンのパラドックス」である。これは一般に帰納のパラドックスとして知られている。グッドマンは，ある全称命題を確証する複数の事例が別の全称命題をまったく同等に確証することを明らかにしたが，彼の議論の真の意味は，クワインも指摘するように，種（ならびに類似）という概念の問題性を浮彫にした点にある。それは本来的に種という概念に孕まれたパラドックスに他ならない。著者は種の論理的構成（logical construction）を「本質的類似」（essential similarity）を基礎として実地におこなうことを試みる。著者の定義によれば，個体aと個体bとは，(1) ある文脈において・ある目的との関連で，(2) 双方の差異にもかかわらず，(3) 同等であるとき，そのときに限って本質的に類似している。この定義のモデルを経験領域に求めつつ種を観察するとき，種が垂範者（paradigm）と引き立て役（foil）とを構成要素とするダイナミックな構造をそなえることがわかるだろう。換言すれば，種は独特なプロトタイプ性（E.ロッシェ）をもつのである（ただし認知心理学におけるカテゴリー論は，種のダイナミズムを十分捉えていないと思える）。

本章の締め括りとして，著者は日本語の侮蔑表現を意味論の見地から分析する。日本語で「など」「でも」を初めとする助詞や接尾辞が侮蔑の言語行為に使用されるという事実はよく知られている。しかし従来，こうした言語現象については明確な説明がなされてこなかった。本論文の記述はこの不足を補うものである。

第Ⅱ章「いのちの表現としての〈因果性〉」は，前章の種の分析を継承しながら，新たに因果性の問題に観察の焦点を絞り，本論文の構想をいっそう具体化することを目指している。種と因果性は深く結びつく。人間が態度や行為のうちで事象とかかわるには，事象の可能な変容に先回りして対処しなければならない。事象の種への編成には事象の性向（disposition）の把握が必ずともなう。「もしこのようにすれば事象はこうなるだろう」という，事象の性向に依拠した推論は，因果的推論に他ならない。

因果性とは何か，因果性概念は論理的・営為的観点からしてどのように構成されているのか。これが本章の主要な問題である。これに対して本章の考察は，因果関係が人々の相互行為の類比概念であるという原型的な理解（類比説 analogy theory）を引き出している。いっそう具体的にいえば，〈因果性〉をサールの言語行為論にいう〈指図〉（directives）タイプの相互行為の類比と見なすことで，因果性概念の固有な構成のみならず，因果性にかかわる多くの問題（因果性に仮託されたある種の必然性，原因の結果に対する先行性，因果の一方向性，等）を解明しうるという提案をおこなう。

因果性の類比説を補強するために，本章では，これと競合するいくつかの学説が批判的に検討される。因果性の哲学説としては，因果関係の項に関して個別主義と一般主義の対立がある。すなわち，原因や結果であるものは，個別者なのかそれとも一般者なのかという対立である。また，因果関係の質に関しては，規則主義と必然主義の対立がある。すなわち，因果関係が出来事の単なる規則的な継起に還元されるのか，それとも因果には必然的な絆があるのかという対立である。ヒュームが規則主義を明確に打ち出したことは哲学史上よく知られているが，カントを含めたその後の考察はいずれもこの規則主義への応答と見なしうるだろう。著者は因果性をめぐるこの理論状況を踏まえつつ，種のカテゴリーの独自さを強調することによって，この二様の対立そのものの超出を企てる。因果性は経験の客観的な図式であっ

て，その限りでリアルな必然性をともなうものとして体験される。問題は，因果的必然性とは何かであろう。本章はこの問題を言語分析の見地から考察しているが，結論として，因果性概念に古典的な意味での論理的構成を与えることは不可能であるとの命題を導いている。因果性を表現する文（因果文）が実質含意（material implication）とは別の論理による表現であることは自明であり，それをある種の反事実的仮定文（counterfactual conditionals）と見なす見地があるが（演繹説とその修正説），ここでも示唆に富むのはグッドマンの分析である。その分析を追試する中から，本章は，因果文を演繹として分析することは不可能でありそれはむしろ拡張された意味での論理的＝営為的複合であるという知見を引き出している。因果性には一つのパラドックスが蔵されている。このパラドックスと帰納に関するかの「グッドマンのパラドックス」とに通有するものこそ，本論文のテーマである〈種〉の問題性に他ならない。

本章の末尾で，因果性と技術の関連が論じられる。種を編成する人間的営為をわれわれは存在論的な意味で「技術」と呼ぶ。ふつうに称される技術はもとより，芸術，呪術，儀礼，遊び，労働などといった各種の営為は，それが種の制作の一環であるかぎり勝れた意味で技術である。最後に本章は，因果性概念が単一の音を奏していないことに読者の注意を促す。種の編成の方式は一通りではないし，字義的なものばかりでもない。これは，世界概念についても教えるところの多い事実であろう。

第Ⅲ章「人間の〈合理性〉は知覚に根ざす」では，人間性の一部としての種の編成と世界化の営みが，古典的な見地からは説明がつかないことを論証する。思想史を顧みると，人間を理性的動物と定義するロゴス中心主義の人間観が有力でありつづけたことが知られる。人間性はロゴス（理性ないし言語）と同一視されたのであり，逆にいえば理性と言語がすべての人間性を覆うかのような様相を呈したのである。著者はこの動向に抗して，理性概念と言語観の新たな構想を模索する。具体的にいえば，メルロ＝ポンティのいう両義的なものとしての〈知覚〉に理性と言語の萌しを認めることによってロゴスそのものの拡張を図るのである。驚くべきことに，本章で著者は，昆虫の蝶ですら生命の深みに根ざした〈理性〉の持ち主だという観察を導いている。

これまでの章が考察を世界へと定位してきたのに対して，本論文最終の第Ⅵ章「人間はいかにし〈外部〉と交感しうるか」では，プロローグで予告された世界論の構想をひととおり完結するべく，世界ではなくその外部へと考察の力点が移動されることになる。そのために本章の議論は，現象学や言語分析を援用しつつ〈感覚〉概念を再考することに費やされている。知覚がすでに意味をはらみ事象の本質に繋がれているのに対して，感覚は意味ではないもの，〈非意味〉の範疇に含まれる。それは無意味ではないし，反意味でもない。知覚についての哲学的な議論はしばしばなされてきたが，近年，感覚についての議論がきわめて手薄だと言わざるを得ない。感覚が哲学にとって真の問題であるゆえんを論証することも本章の一つの狙いである。

論文審査の結果の要旨

学位請求論文として提出された本著書は，分類，定義，知覚，感覚，意味，といった科学のみならず人間の日常生活の根幹をなしている枠組みに対して，哲学的人間学の立場から，その有り様を問い直した労作である。しかも，哲学の通弊な既成概念に依拠することなく，言語学や社会人類学等の領域に知性の越境を図りつつ，思索が進められている。

初めに，分類という営みが分析され，これが，本質・種という概念を成立させると共に，怪異なものを排除する働きを内在させていることが明らかにされる。第2章では因果性概念を，人々の相互行為の類比概念として原型的に理解することが図られる。第3章では，人間の特質を理性と言語に求める動向に抗して，動物とも通底する「知覚」に求める方向がとられる。第4章では，意味付与が既になされている知覚との対比で，もはや「非意味」というべき「感覚」概念をいかに把握すべきかという課題が論じられている。

これらの作業を，著者は，哲学はいうに及ばず極めて広範な文献の長年にわたる渉猟を通じ，自らの思索を練り上げることにより遂行している。著者の強靭な思索は瞠目すべき新たな多くの知見をもたらしそれだけで既に十分賞賛に値するものであるが，にわかに余人の安易な模倣を許すものではない。他方，著者の考察は，いわば副産物として，他の

分野の研究者にとっても示唆を与える多くの成果を生み出している。そのうちの二，三をあげるならば，因果概念の哲学史記述の統一的視点，類比概念を軸とした修辞学的分析，侮蔑表現に関する日本語の助詞の分析である。

以上により，本書は，博士（人間科学）の学位論文として非常に優れたものと判定した。